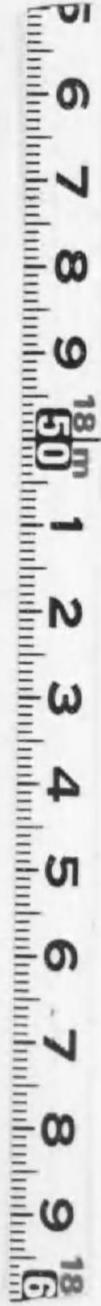
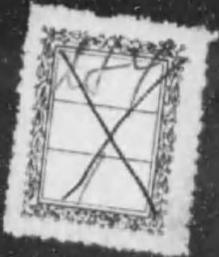


特116

716

七
 騎
 落
 弱
 法
 解
 結
 上

三



始





43116
716



七騎落 概説

外十三卷ノ一

石橋山の戦敗れて頼朝は安房の方へ落ち行かんとしける時、一行は八騎なり
 かば八騎といふことは源氏に取りて不吉の例なりとて其の中の一人を船より下せと
 頼朝の言の出でしより、誰か彼かを選びも、いづれも主君と命を共にせんと應ず
 るものなかりけり、土肥實平は其の子遠平と共に父子二人在船しけるを以て、父
 子の中一人を下船せしむることとなり、遂に遠平を去らめたるが、其後遠平は和田
 小太郎の手に救はれて、頼朝に忠勤を抽でけり。

大正
 11. 4. 5
 内交

方へ開かばやとあじひの^{先ツカへ確カリ}かよ去肥
 の決^{シテ}郎^{建平}御前^{因カキシモリ}にの^{頼朝}餘^{朝カニサツリ}りに身方
 至^ブ勢^{セイ}方^カにある^{ヒト}回^{ヒラ}しまづ安房上総の
 方^{カタ}へ開^{ヒラ}かうする^{ヒト}に^{ヒト}てある^{ヒト}ぞ急い
 て舟の事^{ヒト}と申し^{ヒト}付け^{ヒト}の^{ヒト}長^{シテウケテ}の
 てる^{ヒト}さ^{ヒト}く^{ヒト}より^{ヒト}御舟^{ヒト}の事^{ヒト}と申し
 付けて^{ヒト}候^{ヒト}さ^{ヒト}い^{ヒト}て^{ヒト}る^{ヒト}さ^{ヒト}れ^{ヒト}う^{ヒト}ず^{ヒト}る^{ヒト}

頼朝^{カソチ}の^{シテウケテ}い^{ヒト}かに^{ヒト}實平^{シテウケテ} 御前^{ヒト}に^{ヒト}の^{ヒト}

頼朝^{サツリ}唯^{ヒト}今^{ヒト}船^{セン}中^{チウ}に^{ヒト}供^{ヒト}した^{ヒト}る^{ヒト}人^{ヒト}救^{ヒト}め^{ヒト}い^{ヒト}か^{ヒト}狂^{ヒト}

あり^{ヒト}ぞ^{ヒト}「^{ヒト}さ^{ヒト}ん^{ヒト}ひ^{ヒト}た^{ヒト}ぞ^{ヒト}七^{ヒト}騎^{ヒト}」^{シテウケテ}の^{ヒト}者^{ヒト}作^{ヒト}

頼朝^{カケテ確カリ}「^{ヒト}さ^{ヒト}て^{ヒト}は^{ヒト}頼朝^{ヒト}ま^{ヒト}ぞ^{ヒト}の^{ヒト}八^{ヒト}騎^{ヒト}」^{シテウケテ}より^{ヒト}あ^{ヒト}ま^{ヒト}き^{ヒト}あ^{ヒト}

と^{ヒト}思^{ヒト}ひ^{ヒト}出^{ヒト}た^{ヒト}る^{ヒト}事^{ヒト}あ^{ヒト}り^{ヒト}。祖^{ヒト}父^{ヒト}為^{ヒト}
 義^{ヒト}鎮^{ヒト}西^{ヒト}へ^{ヒト}開^{ヒト}き^{ヒト}し^{ヒト}時^{ヒト}も^{ヒト}主^{ヒト}後^{ヒト}八^{ヒト}騎^{ヒト}。
 父^{ヒト}義^{ヒト}新^{ヒト}朝^{ヒト}江^{ヒト}州^{ヒト}へ^{ヒト}落^{ヒト}ち^{ヒト}給^{ヒト}ひ^{ヒト}し^{ヒト}も^{ヒト}主^{ヒト}

後ハ騎。思入シ不吉フキツの何ナニなり。実平ミナモト

はからひシテて船フネより一人イチニンあろう。佐へ

長チカつての實平ミナモト位イせ承ウケり。舟フネの

せがセいよイ立ちチちチよりヨリ御供ミツケのノ人ヒトをヲ

渡ワタせばバまづマ一番イチバンにはニ田代タノ殿ノ

二ニ妻メにはニ新開ニウカイのノ次郎ジヤウ又マタ

三ニ番サンにニ出デ屋ヤのノ三郎サンヤウ四ヨ番バンのノ佐サ

○小説

房フサ五イ妻メにはニ實平ミナモトのノ六ロク妻メにはニ

同ドウじキ遠平トウヘイ艦板クワンパンにニ義實ギジツ

ありアリこのコノ人ヒトがガ君キミのためタメにニありアリこのコノ

人ヒトがガ君キミのためタメにニ龍門リウモン原ハラのノ出デ

屍シとト曝ハクすスもモ惜オソしシかカらラまマじジきキ

命イがガあアりリ行ユクれレとト撰センみミ出デたタんンとトさサ

ものモノ實平ミナモト思オモひヒかカねネ希セ面メンたるタル

十騎名

二

頼朝詞 カケテ

ばかりあり ナラフ 赤面 アカオモ たるばかりあり。
 いかにも オソク 實平 シテウケテ 行 シテウケテ 遅 オソク まで 先ヲカヘ重シモリ 急いで ツカガキキア
 あり ツシメ 急いで ツシメ 御舟 オシネ より オシネ 御あり
 何 ツシメ と ツシメ 某 シテカキテ確カリ に 義実カケテ 御舟 オシネ より オシネ あり 湖カニ
 御供 オシ の トモ 内に イナ 某 シテ の シテ 老體 オシ まで オシ の シテ 程 オシ に。

かの オシ 船 オシ 中 オシ に オシ 命 オシ 二 オシ つ オシ 持 オシ たらん
 儀 オシ に オシ て オシ の オシ あり オシ の オシ 艦 オシ 板 オシ に オシ 召 オシ されて オシ の
 所 オシ なる オシ 陸 オシ の オシ 近 オシ まで オシ 中 オシ じ オシ 候 オシ あり オシ 候
 可 オシ 陸 オシ の オシ 船 オシ 中 オシ に オシ 命 オシ 二 オシ つ オシ 持 オシ たらん

十景之池

三

ずる者と御取よりありされゆ入
 シテカツテ
 引れぬ思議の事と承りゆものか
 重シモリ
 なる人ば生ずるより死するまで
 命とば一つこそ持ちてゆ二つ持
 ちたる謂ゆか 義賢サナラメ
 引んば暮も昨日
 まての命と二つ持ちてゆと早一
 つの命とば我が君に奉らせよけ
 確カリ
 イト

てる 引テカケテ その謂ゆ作 義実ウケテ
 引テカケテ
 引てゆ。昨日石橋山の合戦に於て
 て作真田の字一義忠の副将軍
 を賜付り候野と組んで討たれ
 ぬ。これ親子は一體二つの命お
 らすや。見申せば去肥殿てそ。この
 御母に親子一所より渡られゆ。此か
 引テカケテ
 引テカケテ

残つて遠平とありすか。遠平と
 残つては分あつたか。親子の内へ
 ありられぬ。むはては。餘りの
 道理にもものあつたまひそらかに
 遠平。君よりの。後ほてあるそ。
 急らで御毎よりありぬ
 何と御毎よりありよと。停せぬか
 子方サテリ

シテカッテ
 なかあかの事急いであり作へ
 子方サテリ
 遠平幼くとも君の御大事に
 立たん事。誰にか方りのべき。御
 毎よりありませぬ。シテカッテ
 事。とやす者か。君の御為父
 が命にてあつたか。急いで御毎よ
 りありぬ。子方サテリ
 子方サテリ

命とて背くとも。御身より向あり
 まゞるシテカシテ確カリト強ク言徳道新の事と申
 すものかな。君の御為父が命とて
 背くともありまゞるソムと申すは
 その儀ならん手には反掛けまじ
 いぞ義は実カケテ習く。これの君の御門オシ出あるは
 偽りたるが實平アチマ 行くまゞても果
手強ク勢ヲツケ
ヒト
オシ
カト
デ
シテ
困カニ重シモリ

が誤りての可詮ありまゞるシヨクと
 申す者とおろそしやう。果御身
 よりありまうずるはての子カカシテサキリ
 申し候。さらば果御身よりありの
 べシテカシテ確カリト強ク何とありまうずることや。ま
 げ先チカノ用ガニにげみ今こそ果が子にて候へ
先チカノ確カあれと見えよ。敵大勢討ち来て候。
カカシ
カホ
シ

かま入て集か子と名のつて。壽
 帝（カミ）に封死（シ）せよ（シ）お名残（シ）こそ惜（シ）
 けれ（シ）か（シ）く（シ）て（シ）我（シ）か（シ）子（シ）と（シ）お（シ）ろ（シ）く（シ）直（シ）ま（シ）。
 實平御舟にま（シ）り（シ）け（シ）り（シ）地（シ）か（シ）く（シ）く（シ）
 見（シ）の（シ）る（シ）實平か（シ）ま（シ）と（シ）互（シ）の（シ）心（シ）と（シ）思（シ）ひ（シ）
 や（シ）り（シ）親（シ）子（シ）の（シ）別（シ）れ（シ）痛（シ）く（シ）や（シ）子（シ）方（シ）父（シ）の（シ）
 別（シ）は（シ）申（シ）す（シ）に（シ）及（シ）ば（シ）ず（シ）。君（シ）と（シ）始（シ）め（シ）集

○小註
○清中

ら（シ）せ（シ）て（シ）皆（シ）人（シ）々（シ）に（シ）御（シ）名（シ）残（シ）と（シ）そ（シ）惜（シ）し（シ）
 う（シ）へ（シ）上（シ）高（シ）の（シ）松（シ）浦（シ）佐（シ）用（シ）姫（シ）か（シ）の（シ）
 松浦佐用姫（シ）か（シ）唐（シ）土（シ）舟（シ）と（シ）慕（シ）ひ（シ）俺（シ）
 び（シ）て（シ）諸（シ）に（シ）ひ（シ）れ（シ）伏（シ）し（シ）有（シ）根（シ）も（シ）今（シ）
 遠平（シ）か（シ）親（シ）と（シ）子（シ）の（シ）別（シ）み（シ）か（シ）ら（シ）じ（シ）
 と（シ）皆（シ）浪（シ）と（シ）そ（シ）流（シ）け（シ）る（シ）契（シ）強（シ）
 あ（シ）ま（シ）の（シ）早（シ）舟（シ）と（シ）暫（シ）と（シ）だ（シ）に（シ）も（シ）言（シ）ひ（シ）

山崎の

あへず跡と見送りたらずあへ
^{地上}はや遠ざかる浦の波立ち別れ
 ゆくありさまと ^{子方}餘の人を心し
 て ^地憐みあへる ^{子方}舟の内は ^{日中}實平
 のひたすらに ^伊強氣とんえど
 なかあかりへりえんおまのもせて ^心
 強くも行く跡に敵大勢見えたり

すそや遠平の討たるとして ^頼
 朝もあをれみ陸とん給へばさす
 かげに ^伊恩愛の契も唯今と限
 りぞと思ひ實平は磯邊に向ひ
 人知れず ^甲心のまゝあらはあをれ
 遠平と ^尾前には討死せばやとあ
 こがれて ^飛飛び立つぞかりに思子

の別ぞ寝ありける別ぞあは
れありける。

早義盛
一セイ上
拍子合

引張月の西の空行く定めぬ舟
路かあ沖ある波の音までも周
の聲かこし。恐しや。あれはんえ

たるかに度舟にてあつげふゆ急い
で舟と傳ぎしや。長つてふ。いか

かしゆ。あれは兵船一艘見えてはま

てあたより詞とかけしうずるたてゆ

義実サアリ
あるまう作いかはあれある舟の

誰がなされたる御舟にてゆそ

わかれもそあたの船影と。怪しく

思ひ休らまあり。そも誰人の舟

やらん。これはず肥の次郎実平

が乗りたる舟びよ ワキカキテ 何と去肥
 殿の御舟と佐や シテカキテ 安かあかの
 事。さそそその御舟のたが召されたる
 御舟にてゆぞ ワキカキテ くれこそ和国のふ
 右郎義盛が乗りたる舟びよ
シテカキテ さそそ和国殿の御舟にて佐か
ワキカキテ 安かあかの事。ゆ々中しし通せし

如く御身方にし乗りたる舟にこれ
 まぞし乗じてゆ。さそそ君のその御舟
 には佐佐か シテカキテ 和国は内々申し合せ
 たる事のゆ向。唯今し乗りてゆ。さ
 り安からま。つたはかりつて心とさう
 ずるにいてる。いかに和国殿へ申しゆ。で
 れまぞの御舟乗りめでたうゆ。さり

ちから。面目シメもあまき事のゆ。昨日の
 言ほごより我が君をへん失ひし
 し。かやうに浮かれ舟フネとありて事
 ねし。作ツクリ又マタ何ナニと君のその御
 舟フネに流座あまきとゆや。式シテウケテん作
 言語道断ワキカシテ確カラの事にてゆものかあ。
 われ身方ミカタとて君ミコび出イでて月日ツキヒとも

頼みなる頼朝への離れ申し。この
 上ウヘは命あつても行かせん。ぞて
 自害ジガイに及およぶんと。腰コシの刀ヤに手テと掛
 くら。暫シテカタチく。君のこの舟フネは座イら
 何ナニと君はその御舟ミフネには座イらわ
 何ナニとあかの事コト。式ワキカシテそ何ナニとやう
 への座イらゆぞ。式シテ用カニれは戲事レシコトにて

トカシカ

ト

依。幸陸近うゆほどにその舟
 とも寄せられゆへ御舟とも寄
 せ依ひて陸にては對面あらうす
 るにてゆ ワキウケテ 心得申し依。さらばわが
 て陸へ来らうずるにてゆ シテ用カニ いかし
 一依津前にて依 ワキ用カニ 我が君と見え
 たりて。今の安堵侍りてゆ シテウケテ げに

げにむにて依 ワキ確カク いかに出肥殿に申
 し依 シテウケテ 行事にてゆぞ ワキカシテ この御供
 の内に行くとて侍りお息遠平は御
 舟ゆらはぬぞ シテカシテ その事にて依。
 さら謂あつて陸に疎し置きて依
ワキ用カニ 舟 ワキ 舟よりかくとかし度くおゆひつ
 れども。必前集はむとつくはせられ

ゆその返報に今までわかきも
 中さぬありい^{確かり}て去肥殿に引出物
 中さんと隠^{カウ}置きたる舟^{フナ}底より。
 遠平と引まゐりてカをせけれも
 シテカ^{シテカ}ル上^上カ^カンテ^{ンテ}サ^サラ^ラフ
 ヨク^{ヨク}その時^時實^實平^平あ^あま^まれ^れつ^つ 夢^夢カ^カ現^現カ
 こ^こは^はい^いか^かに^にと^とて^て ぞ^ぞえ^ええ^えず^ず 抱^抱ま^ま付^付ま^ま
 位^位ま^ま居^居た^たり^り 甲^甲 引^引立^立テ^テ 允^允 入^入 仙^仙家^家に^に入^入り^りし

○小謡

身^身の^の半^半日^日合^合の^のほ^ほろ^ろに^に立^立ち^ちか^か入^入り^り七^七世^世
 の^の孫^孫に^に逢^逢ふ^ふ事^事の^のた^たら^らふ^ふも^も今^今は^は 知^知
 ら^られ^れた^たり^りた^たら^らも^も今^今は^は 知^知ら^られ^れた^たり^り。
 ミ^ミチ^チカ^カ 用^用カ^カ ち^ちか^かて^て 義^義 感^感は^は ち^ちし^しひ^ひさ^さと^とこ^この^の者^者と
 は^は何^何と^として^{して} 忍^忍し^し連^連れ^れら^られ^れて^て ゆ^ゆそ
 コ^コキ^キウ^ウケ^ケテ 引^引ん^んぶ^ぶこ^これ^れま^まで^で 伴^伴ひ^ひ中^中し^した^たる^る 指^指
 を^を 湯^湯前^前に^にて^て 申^申し^し上^上げ^げら^らず^ず して^{して} ゆ

上 七 七

七

シテカッテ
 急いで御物語りゆへ
コキ語確カク
 式でも昨日
 石橋山の合戦破れ一かば大庭が
 手搦君と討ちあらんし。大勢諸
 に打ち出でたりしに某も一前に
 討つて出て一か行と名をれつ。ま
 かねたる若武者一騎ひかたり。某
 駒かけよせて見れど流子息遠平

あり。急ぎ馬より飛んで下り。生
 け捕る體にもておし舟底にのせ
 中し。これまで体ひまりたり。なん
 ほう去肥般に義盛の忠の者にて
シテ用カキ
 ゆぞかふる有強き事こそゆはね
 唯今の御物語と聞きゆひて落
 涙はりてゆと。さぞ人々の不覺の

○切達雜子

二五七

ト

後ナミダとも思し召すらん日中田カびりあからうれ
一ナミダ位ナミダのナミダ後ナミダのナミダうれナミダれナミダ位ナミダのナミダ後ナミダのナミダ何ナミダかナミダ色ナミダ
まナミダんナミダ唐ナミダ衣ナミダ目ナミダもナミダ夕ナミダ暮ナミダにナミダあナミダりナミダぬナミダれナミダば。
日ナミダのナミダ盃ナミダさナミダりナミダどナミダりナミダにナミダあナミダりナミダ主ナミダ後ナミダもナミダにナミダ悦ナミダび
のナミダ心ナミダうナミダれナミダまナミダのナミダ酒ナミダ宴ナミダかナミダなナミダいナミダかにナミダ實
平ナミダ餘ナミダのナミダにナミダめナミダてナミダたナミダまナミダおナミダあナミダれナミダびナミダとナミダさナミダし
御ナミダ舞ナミダひナミダひナミダへナミダあナミダらナミダばナミダそナミダしナミダ舞ナミダはナミダうナミダすナミダる

○は舞ナミダキナミダリナミダ上ナミダニナミダサナミダリナミダ
にナミダてナミダゆナミダ心ナミダうナミダれナミダまナミダのナミダ酒ナミダ宴ナミダかナミダなナミダいナミダかにナミダ實
かナミダくナミダてナミダ時ナミダ白ナミダをナミダめナミダぐナミダらナミダすナミダすナミダ時ナミダ
日ナミダをナミダめナミダぐナミダらナミダすナミダすナミダ國ナミダ々ナミダのナミダ兵ナミダ馳ナミダせナミダまナミダすナミダ
れナミダばナミダ程ナミダあナミダくナミダ御ナミダ機ナミダがナミダ二ナミダ十ナミダ萬ナミダ騎ナミダにナミダあナミダり
給ナミダひナミダつナミダ常ナミダにナミダ治ナミダめナミダ給ナミダ入ナミダるナミダるナミダのナミダ君ナミダの
赤ナミダ代ナミダのナミダめナミダてナミダたナミダのナミダ始ナミダめナミダもナミダ實ナミダ平ナミダ正ナミダしナミダ
まナミダ忠ナミダ勤ナミダのナミダ道ナミダにナミダ入ナミダるナミダ實ナミダ平ナミダ正ナミダしナミダまナミダ

ニホシナカ

トシノカ

忠勤の道に^シ入^ルる^ニ久^ク矣^キの^ニ家^ノと^シて^モ久^ク
し^クけ^レれ。

弱法師 概説

外十三卷ノ二

河内國高安の里に左衛門尉通俊といへる者、人の讒言を信じて一子俊徳丸を
追放せしが、後に其事なきを知りて不憫に思ひ、俊徳丸の二世安樂の為天王寺に
て一七日修行を為しけり。俊徳丸は親の許を離れて悲みの涙に盲目となり、乞食
と落ちぶれて天王寺に來り、修行を受け、るを通俊視て我が子なる事を知り、も、
人目もあればとて先づ何氣なく日想觀を拜まゝめに、俊徳丸は感興に乘じて
よろめき歩くと人々弱法師との、り笑ふ。いつか日暮れ夜も更けたれば、名乗
り合いて連れ立ち歸りけり。

此曲アマリ位ヲ取ラスサレド餘リサラリトスルハ悪シ
小書 盲目之舞

シテ 高安俊徳	ワキ 高安通俊	役別	装束	季	所
			着附紋熨斗目 素袍上下 小刀 扇	二	大段四天王寺
			面弱法師 黒頭 黒地鉢巻 着附無色縫箔 水衣地色蜡 前黄 (類) 縫紋腰帯 無色黒骨扇指 杖ツキ	曲柄	替古順
				(目番三二卷)目番四	等 高 準

口平通俊門 確カリ上雨カニ

弱法師

結 奇十郎元雅作

カヤウに從者ハ河内ノ國高安ノ
室に左衛門ノ尉通俊ト申す者
にてゆ。さても菓子と一人持ちてゆ
と。さる人の證言より暮に遊
ひ失ひて依。餘りに不便なる程。二
世安樂のため天正寺にて一七日

施行と引きま^{セギヤウ}作^{コソ}今日も施行と

引かせ^{シテ}ぞやと^{コソ}あ^{コソ}ト^{コソ}作^{コソ} 狂言シカク

シテ俊徳丸
一セイ上
拍子合ハズ

出^{シテ}入^リの^{コソ}月^{コソ}と見^{コソ}ざれば^{コソ} 狂言シカク

夜^{コソ}の境^{コソ}と^{コソ}えぞ^{コソ}知らぬ^{コソ} 狂言シカク

海^{コソ}の底^{コソ}ひ^{コソ}あく^{コソ} 心持シ深^{コソ}き思^{コソ}ひと^{コソ}人^{コソ}や

ち^{コソ}さる^{コソ}思^{コソ}と^{コソ}悲^{コソ}み^{コソ} 心持シ比^{コソ}目^{コソ}の^{コソ}枕^{コソ}の上^{コソ}に

知^{コソ}る^{コソ} 心持シ 狂言シカク

は^{コソ}彼^{コソ}と^{コソ}隔^{コソ}つる^{コソ} 心持シ 狂言シカク
り^{コソ}顔^{コソ}あ^{コソ}る^{コソ} 心持シ 狂言シカク
て^{コソ}憂^{コソ}き^{コソ}年^{コソ}月^{コソ}の^{コソ}流^{コソ}れて^{コソ} 心持シ 狂言シカク
山^{コソ}の^{コソ}中^{コソ}に^{コソ}落^{コソ}つる^{コソ} 心持シ 狂言シカク
や^{コソ}せ^{コソ}し^{コソ}思^{コソ}ひ^{コソ}も^{コソ}果^{コソ}て^{コソ} 心持シ 狂言シカク
一^{コソ}や^{コソ}前^{コソ}世^{コソ}は^{コソ}誰^{コソ}と^{コソ}か^{コソ} 心持シ 狂言シカク
又^{コソ}人^{コソ}の^{コソ}後^{コソ}言^{コソ}に^{コソ}より^{コソ} 心持シ 狂言シカク

蜀山人

沈む故思の候かまの曇り。盲目
 とさへあり果て生ともかへぬこの
 世より中^ハ有^クの道^ヲ迷^フみあり^キ
 固^クありも心の周^ハありぬべ^シ
 傳^ヘ聞^ク。彼^ノ二^ノの果羅^ノ旅^カ
 の^二の果羅^ノ旅^ノ周^ノ穴^ノ道^ノの^一卷^ヲ
 もも^ク。此^ノ曜^ノの曼^ノ荼^ノ羅^ノの^一光^ノ明^ノ赫^ク

棄^テて^テ作^ラ末^トと照^シ給^ヒける
 と^カや^カ今^も末^世とい^ひ女^らら^ず
 天王^ノ寺^ノの^一石^ノの^一鳥^ノ居^ニあ^れや^立
 ち^寄り^て拜^まん^いば^立ち^寄り^て
 拜^まん^いば^立ち^寄り^て
 時^も長^閑あ^る日^と得^て遍^ま

貴賤の場は施行をあらせてまゝ
 ぬけりシテ用カニげに有難き御利益法
 界無邊の御慈悲とてクビス撞と接
 いて群集するワキカシテ先ツカヘわこれに出でたる
 乞巧コツガイニシ人のいかにま例の弱法師と
 又シテウケテわれらに名とつけて皆弱
 法師と作せあるぞわヨカニルけあもこ

の身の盲目の足弱車の片輪か
 たらナシ用カニよりろめまありけナ弱法師と
 名つけ給ふナとわりありナげに
 云ひ捨つる言の成までも心あり
 げに聞ゆるぞやまづまづ施行と受
 け給へシテウケテあら有難や用カニ作心持シや花の
 香の聞えぬいかにまよこの花散

佛心集

四

方ガタにあり作ワをワキあうカウテこれあるマカキ籬
 の梅ウメの花ハナが弱ヤ法師ハシラが袖スエビを散チり
 かるシテぞとウケテ憂ウレたテやハ難ナシ波ハ
 津ツのマまナらバたラ木キの花とコそ
 作ツクせアるベまキにコ今イマの春邊ヘもハ半ハぞ
 かしシ梅ウメ花ハナとチ抄シつテ頭カウにチ挿サしテまス
 まスざレれドもシ二ニ月ゲツのト雪ユキのハ衣ヒもハ腐クつ

○小謡

申ウチらニ面オモ白シロのハ花ハナのハ自ミやハあハげハまカの
 花ハナとチ袖スエビにチ受ウけレたハ花ハナもハあハかラ
 花ハナのハぞトよシあハかハあハかハのハ事コト草クサ
 本ホ國クニ土ツチ悉シツ皆カ法ハフ師シ法ハフもハ施セ行コウあレバ
 皆カ成チ佛ブツのハ大ダイ慈ジ悲ヒもハ伸ノばレとシ
 施セ行コウもハ連レンりテ我ワとシ合カせシ袖スエビと
 廣ヒロげてシ花ハナとチ入イル受ウけル施セ行コウの

早ハヤカル上ウヘ明アカカシ

上ウヘカルサラリク

トルルル

引法師

引法師

色々々の受くる施けのも色々に白
 ひ来りけり梅衣の春あれや難
 彼の事か法あらぬ遊び戯れ舞
 ひ謡み折々の網よの傳るまじ
 那彼の海ぞ頼もしまげにや盲
 飛のわれらまで見る心地を梅
 杖の冠の春の長閑けさる難

○サ面独吟

彼の法よよも傳れど難彼の法
 よもも傳れど。それ佛日西天の
 雲よ隠れ急尊の出立遙に
 三會の曉未だあり。あはるてこの
 中回よ於りて行と心と延をへまじ
 同サ面
 そはよわて上宮太子。國家と改め
 万民を教へ佛法流布の世ありて

普く惠と弘め終シテ中用カニツ然れば當
 寺と法建立ありて始めて僧尼
 の法と顯ハ四天王寺と名づけ
 終ハ金堂の法本尊ハ如來輪ハ
 佛像救世觀音とも申すとか太子
 の御前生震且國の思禪所よて
 渡らせ終ハ改ありハ出離の佛像よ

應ハ今日感よ至るまでハ佛法
 最初ハの法本尊と顯れ終ハ御威
 光ハの眞あるかあや末世相惠の
 御誓ハ然るて當寺の佛圖の法
 作ハの品々も亦梅檀の雲木にて
 塔ハの金寶ハに至るまでハ筒像檀金
 ありとかハ萬代よすめるハ龜井の

馬法師

七

水までも水の上流まで西天の無熱
 池の池水を受けつぎて流久し
 三行々までも五濁の入向と道ま
 甲。濟度の舟も寄するある難
 彼の寺の鐘の聲異浦々に響き
 来て。普きおき満朝のまおし照る
 海山も皆成佛の法あり。

早付カツテ

あらざる思議やこれある者よく
 よくかゝる入る。某が追ひ失ひし子に
 て作らるる。思のあまりの盲目
 とありてい。あらざる便と衰へて依
 ものかお。人目もさすかにはいへむ。
 夜に入りて果しく名告り。高安へ
 連れて帰らざらやと存じゆ。やあ

いかに日想觀をも拜み入シテウケテ げまげま
 日惠觀の時シテ ありて 盲目を
 れどもそなたこそふかりカレ上ニ 心ありてある
 日に向ひて東門トシテ を拜み南無阿彌
 陀佛トシテ 何東門との響ありて西
 門石の鳥居トシテ ありて 愚かや天
 王寺の西門トシテ を出でて 極樂の東門

○律と違ひ
 又向ふの倅事トシテ かけにげまげま
 難波の寺の西門トシテ を出づる石の鳥居
 阿字門トシテ に入りて 阿字門トシテ を出づる
 極樂の東門トシテ ありて 極樂の東門
 向ふ難波の西の海トシテ 入りて 日の影
 も拜むかや ありて 面白やわれ盲目
 目とあらざりて 前の弱法師が

彌法師

草香山カクサ地チ北キはいつくイツク 雜サ波ハあアるル 上ウ同ドウ長チヤウ橋キョウのノ橋キョウのノ後ゴ又マタカカなナたタてテあアたタとトありアリくク移シりリ又マタ盲メク目メのノ悲ヒしシまマるル 貴キ縣ケンのノ人ニ又マタ行キきキあアひヒのノ轉テンびビ漂ヒョウひヒ雜サ波ハ江カウのノ足ソクもモとトはハよヨろロろロとトもモ眞マコトのノ精セイ法ホフ師シとトてテ人ニのノ笑ウツひヒ珍チンみミぞゾやヤ思オモへヘばバ恥チしシやヤ

今イマはハ狂キヤウひヒ作サクはハ今イマよりヨリはハ更マシにニ狂キヤウはハ今イマはハ夜ヤもモ更マシにニ人ニもモ狂キヤウりリぬヌいイかカあアるル人ニのノ果クワやヤらラんンそソのノ名ナをヲ名ナ告ツクりリ珍チンへヘやヤ思オモひヒよヨらラずズやヤ誰タレあアれレババ神カミかカいイしシむムとト問トひヒ珍チンみミ高タカ安ヤスのノ宝ホウありアリしシ後ゴ徳トク心シンがガ果クワありアリ

^{地上} 夢ての焼くやわれこそは。父高
 安の通俊よ ^{ミテ} 我も通俊の我が
 父のその御聲と聞くよりも
^地 胸うちら騒ぎあきれつ ^{ミテ} 我の夢
 かして ^地 後徳は。親ながら
 してとてあらぬ方へ逃げ行け
 父の追ひつき手を取つて何と

かつむ難波寺の鐘の聲も夜
 まぎれよ。明けぬさきさき
 あひて高安の里に歸りけり
 高安の里に歸りけり

太政大臣藤原師長、琵琶の奥秘を極めん為め渡唐せんとて途すがら須磨の塩屋に宿りけるに、主の老夫婦は師長の琵琶に堪能なる由を聞き、知れるものとして一曲を所望しぬ。師長請にまかせて弾しけるに、俄に村雨の降り来りしかば、翁は苦を取出して板屋を葺き、琵琶の調子は黄鐘、雨の音は盤渉なれば、今こそ一調子に成りと言ふ。師長た、人ならしと思ひ、琵琶を渡して一曲を彈せしめけるに、妙技神に入れるより渡唐を思ひ止り、其名を尋ねれば村上天皇女御夫婦なりとて姿を隠せしが、や、ありて天皇現れ給ひ、龍王に教して琵琶の名器獅子丸を召し出させ、秘曲を師長に傳へ給ひけりとぞ。

絃 上 概 説

外十三卷ノ三

太政大臣藤原師長、琵琶の奥秘を極めん為め渡唐せんとて途すがら須磨の塩屋に宿りけるに、主の老夫婦は師長の琵琶に堪能なる由を聞き、知れるものとして一曲を所望しぬ。師長請にまかせて弾しけるに、俄に村雨の降り来りしかば、翁は苦を取出して板屋を葺き、琵琶の調子は黄鐘、雨の音は盤渉なれば、今こそ一調子に成りと言ふ。師長た、人ならしと思ひ、琵琶を渡して一曲を彈せしめけるに、妙技神に入れるより渡唐を思ひ止り、其名を尋ねれば村上天皇女御夫婦なりとて姿を隠せしが、や、ありて天皇現れ給ひ、龍王に教して琵琶の名器獅子丸を召し出させ、秘曲を師長に傳へ給ひけりとぞ。

此曲位七輕カラズ緩急モ亦多シ能ク具合ヲ考ヘテ謡フベシ
小書 宛 論能之式

ソレ	龍	面黒髷 赤頭 龍戴 赤地金紋鉢巻 着附段厚板 法被 赤地半切 紋付腰帶 打杖持 琵琶持	ソレ	姫	面焼 焼髷 無色髪帯 着附摺袴 無色唐織 縹水衣	ソレ	藤原師長	風折烏帽子 着附厚板 白大口 軍袴又長袴 縹紋腰帶 神扇	李	所
ワキ	師長從者	着附厚板 白大口 法被 腰帶 大刀 扇	ワキ	師長從者三人	着附無地製半目 素袍上下 小刀 扇	ワキ	師長從者	着附厚板 白大口 法被 腰帶 大刀 扇	八	所
前シテ	老翁	面笑尉又朝倉尉ニ 尉髷 着附無地製半目又小格子厚板ニ 姓茶水衣 綴子腰帶 腰巻 耐扇指 田子持	ソレ	姫	面焼 焼髷 無色髪帯 着附摺袴 無色唐織 縹水衣	ワキ	師長從者	着附厚板 白大口 法被 腰帶 大刀 扇	月	所
後シテ	村上天皇	面中將 初冠(櫻) 着附赤地縹袴 軍袴 白大口 差貫 腰帶 扇	ソレ	姫	面焼 焼髷 無色髪帯 着附摺袴 無色唐織 縹水衣	ワキ	師長從者	着附厚板 白大口 法被 腰帶 大刀 扇	曲	所
ソレ	龍	面黒髷 赤頭 龍戴 赤地金紋鉢巻 着附段厚板 法被 赤地半切 紋付腰帶 打杖持 琵琶持	ソレ	姫	面焼 焼髷 無色髪帯 着附摺袴 無色唐織 縹水衣	ワキ	師長從者	着附厚板 白大口 法被 腰帶 大刀 扇	目	所
									五	所
									能	所
									流	所
									高	所
									等	所

絃上

全剛五郎作

輝耀立衆 朗々(師長謡念)
 柏子ニ合 ヨク
 八重の舟路をゆく舟の八重の
 舟路をゆく舟の唐土のいつくある
 長とはわが事なり 師長曰 兩カニ
 君天下に隠れあふ琵琶の御上
 手にては唐の御上

ますすふよりのこの度思しるすたち
道すから名所の月々もは祭らせん
ために唯今津の玉須磨の浦に
御下向にてい師長サン上われひきていつの
夕を都の空また夜深まよ格立
ちてまにんえたる山崎も過ぐ
れど後にちやありて拍子合波てす袖の

湊川波てす袖の湊川また知ら
ぬ方にもわれは生田の伸りくる月
の木の間にて甲心筑紫の格の道
されどもこれの唐土の門出と思
む勇ある。駒の林とよそに見
て。須磨の浦にも着きたけり
須磨の浦にも着きたけり

早羽ハヤハ

御ミ急イソぎカのハ程ハにシれハさヤ律リツのクニ
 須ス磨マの浦にシ御ミ恙ヤスきたテてハ暫シくテ
 の前にシ御ミ休ヤスみアりコトノ由ユとモ
 御ミ事ツねアらウずシて依
 持ツちカぬル夕シ汲クむ桶の苦きま
 又マカツく考の杖 松ツまキ業ガと須
 磨マの浦 眺ノに憂さヤ忘ルらん

シテ射ニ人ノ上ニ御ノ入ノ用カニ
 ツセ城ノ一セイノ拍子合ハズ

シテ上ノ朝カニ

面オ白シや浦子入日ハ海上に浮須
 磨マや明るの浦のまま塩焼く巻
 の心にもさも面白う作あり
 南ミと遠に眺むれハ雲に續ける
 紀キの路の小嶋シ 由シ良ラの戸渡ル
 さや舟ノも夕退オ風ノ吹上や
 遠ツ浦カがら住ミ吉ヨの松とそのれ

ツシカル上ノ

海趣シテ田に 富嶋スミの磯イソや 昆陽クニヨウ 釜カマ 釜カマ 釜カマ
 名ナにニ 繪嶋エと云イハひヒあアらラいイかカでデ
 か筆カヒツにもニ 及びヨビべベまマ あアらラ面オモ白シロのノ
 浦ウラのノ 景色ケシキやヤ げゲにニ 面オモ白シロまマいイ延ノビ虫ムシ
 の磯イソ屋ヤとト 淡路タンロ 嶋シマ 阿波アハ 沖チ 舟フネのノ
 傳ツタまマいイまマるルなナ 雨アメこコさサめメれレ今イマ一ヒト返ヘリ
 もモ 汐シ汲ヒめメやヤ 人ヒトぞゾ 上ウ月ツキ 明アカカカニニ 月ツキ 明アカカカニニ 月ツキ 明アカカカニニ
 〇〇 小コ 謡ウタ

奥ウチのノ 磯イソ 奥ウチのノ 千賀チカのノ 塩シホ
 竈カマドのノ 名ナのノ みミ ちチ 遠トホ けケ れレ ちチ むム いイ かカ
 運ウツ ばバ んン 伊イ 勢セ 嶋シマ やヤ 阿ア 波ハ 傳ツタ 嶋シマ のノ
 汐シ とト 六ム 度ド 重オモ ねネ てテ もモ 汲ヒ みミ 難ナ しシ
 田タ 子コ のノ 浦ウラ のノ 汐シ とト べベ いイ ざサ 下シタ りリ たタ んン
 わワ くらクラ ぶブ にニ 訪ヒツ むム 人ヒト あア らラ ばバ 他タ ぞゾ
 登ノボ へヘ てテ こコ のノ 須ス 磨マ のノ 浦ウラ のノ 汐シ 汲ヒ まマ ンン

須磨の浦の汐汲まし。塩屋に
 歸り休まらざるにて。塩屋の
 主の歸りて。御宿と借らばやと
 存じゆ。いかんあるは塩屋の主
 にてあるか。此の塩屋の主にて
 引れは産るの政大臣野長公と
 申して天下に隠れまゝまゝぬ疑

登の御上手にて作か。入唐の
 御望にてこの浦に御下向にて
 一夜のお宿と暮らせ作入。わ
 やうのへにて法座ゆ。異浦にて
 御宿と暮されゆ。あら何ともおわ
 難波わたりにてこそ異浦あんと
 申すべけれ。須磨の浦まで

なまの^{シテ用カニ}かた^{シテ用カニ}御宿と^{シテ用カニ}まらせ^{シテ用カニ}伏へ
 見^{シテ用カニ}若^{シテ用カニ}く^{シテ用カニ}の^{シテ用カニ}も^{シテ用カニ}さらば^{シテ用カニ}御宿と^{シテ用カニ}ま
 らせ^{シテ用カニ}べ^{シテ用カニ}一^{シテ用カニ}年^{シテ用カニ}雨^{シテ用カニ}の^{シテ用カニ}祈^{シテ用カニ}の^{シテ用カニ}御^{シテ用カニ}
 時^{シテ用カニ}非^{シテ用カニ}泉^{シテ用カニ}苑^{シテ用カニ}に^{シテ用カニ}て^{シテ用カニ}琵琶^{シテ用カニ}の^{シテ用カニ}秘^{シテ用カニ}曲^{シテ用カニ}と^{シテ用カニ}
 遊^{シテ用カニ}ば^{シテ用カニ}ふ^{シテ用カニ}れ^{シテ用カニ}か^{シテ用カニ}ば^{シテ用カニ}龍^{シテ用カニ}神^{シテ用カニ}も^{シテ用カニ}あ^{シテ用カニ}で^{シテ用カニ}け^{シテ用カニ}
 に^{シテ用カニ}や^{シテ用カニ}こ^{シテ用カニ}も^{シテ用カニ}の^{シテ用カニ}晴^{シテ用カニ}天^{シテ用カニ}俄^{シテ用カニ}に^{シテ用カニ}曇^{シテ用カニ}り^{シテ用カニ}大^{シテ用カニ}
 雨^{シテ用カニ}降^{シテ用カニ}る^{シテ用カニ}事^{シテ用カニ}終^{シテ用カニ}白^{シテ用カニ}それ^{シテ用カニ}より^{シテ用カニ}して^{シテ用カニ}この^{シテ用カニ}

君と^{シテ用カニ}雨^{シテ用カニ}の^{シテ用カニ}大^{シテ用カニ}庭^{シテ用カニ}と^{シテ用カニ}か^{シテ用カニ}す^{シテ用カニ}と^{シテ用カニ}か^{シテ用カニ}わ^{シテ用カニ}か^{シテ用カニ}ま^{シテ用カニ}ど^{シテ用カニ}
 や^{シテ用カニ}ご^{シテ用カニ}と^{シテ用カニ}あ^{シテ用カニ}ま^{シテ用カニ}い^{シテ用カニ}こ^{シテ用カニ}の^{シテ用カニ}君^{シテ用カニ}に^{シテ用カニ}一^{シテ用カニ}夜^{シテ用カニ}の^{シテ用カニ}お^{シテ用カニ}宿^{シテ用カニ}と^{シテ用カニ}糸^{シテ用カニ}
 ら^{シテ用カニ}せ^{シテ用カニ}て^{シテ用カニ}秘^{シテ用カニ}曲^{シテ用カニ}と^{シテ用カニ}も^{シテ用カニ}聴^{シテ用カニ}聞^{シテ用カニ}や^{シテ用カニ}す^{シテ用カニ}あ^{シテ用カニ}ら^{シテ用カニ}ば^{シテ用カニ}
 例^{シテ用カニ}あ^{シテ用カニ}ま^{シテ用カニ}い^{シテ用カニ}思^{シテ用カニ}出^{シテ用カニ}カ^{シテ用カニ}の^{シテ用カニ}蟬^{シテ用カニ}丸^{シテ用カニ}の^{シテ用カニ}逢^{シテ用カニ}坂^{シテ用カニ}や^{シテ用カニ}
 葉^{シテ用カニ}屋^{シテ用カニ}は^{シテ用カニ}て^{シテ用カニ}琵琶^{シテ用カニ}と^{シテ用カニ}弾^{シテ用カニ}き^{シテ用カニ}終^{シテ用カニ}み^{シテ用カニ}入^{シテ用カニ}ら^{シテ用カニ}の^{シテ用カニ}
 君^{シテ用カニ}の^{シテ用カニ}須^{シテ用カニ}磨^{シテ用カニ}の^{シテ用カニ}塩^{シテ用カニ}屋^{シテ用カニ}露^{シテ用カニ}も^{シテ用カニ}た^{シテ用カニ}ま^{シテ用カニ}ら^{シテ用カニ}ぬ^{シテ用カニ}軒^{シテ用カニ}の^{シテ用カニ}
 板^{シテ用カニ}間^{シテ用カニ}遇^{シテ用カニ}ひ^{シテ用カニ}慈^{シテ用カニ}ま^{シテ用カニ}砌^{シテ用カニ}に^{シテ用カニ}逢^{シテ用カニ}み^{シテ用カニ}ぞ^{シテ用カニ}娘^{シテ用カニ}り^{シテ用カニ}かり^{シテ用カニ}

けり上。里朝離れ。須磨の家カニサリ居の習ニと
運て。須磨の家カニサリ居の習ニとニ行事ニと
松の柱カニサリや行カニサリあめ。垣カニサリのカニサリ一重カニサリにてカニサリ成カニサリも
たまらカニサリず痛カニサリしカニサリや海カニサリのカニサリ少しカニサリ遠カニサリけれ
も。波カニサリたカニサリごとカニサリもカニサリとカニサリてカニサリ聞カニサリえカニサリまカニサリてカニサリいらカニサリの
まカニサリまカニサリもカニサリとカニサリもカニサリはカニサリ解カニサリひカニサリまカニサリよカニサリしカニサリよカニサリし
それカニサリも御カニサリ琴カニサリ琴カニサリとカニサリ。寝カニサリられカニサリぬカニサリまカニサリにカニサリ遊カニサリ

ばカニサリせカニサリやカニサリわれカニサリらカニサリもカニサリ聽カニサリ聞カニサリすカニサリべカニサリいカニサリわれカニサリも
聽カニサリ聞カニサリすカニサリさカニサリんカニサリ。いカニサリかカニサリにカニサリしカニサリよカニサリげカニサリひカニサリのカニサリ夜カニサリも
すカニサリから御カニサリ琴カニサリ琴カニサリとカニサリ遊カニサリばカニサリれカニサリやカニサリいカニサリこのカニサリ
須磨カニサリのカニサリ卷カニサリのカニサリ春カニサリかカニサリとカニサリよカニサリ保カニサリ氏カニサリこカニサリのカニサリ浦カニサリに
後カニサリされカニサリ給カニサリひカニサリ。初カニサリめカニサリてカニサリ妻カニサリのカニサリ味カニサリのカニサリ辛カニサリまカニサリ
とカニサリ知カニサリらカニサリしカニサリらカニサリもカニサリ。まカニサリだカニサリはカニサリゆカニサリじカニサリまカニサリぬカニサリ旅カニサリ衣カニサリ
位カニサリくカニサリはカニサリかりカニサリあカニサリるカニサリ後カニサリのカニサリ露カニサリのカニサリ玉カニサリのカニサリ結カニサリ琴カニサリ

○小菘

を弾き鳴し。喜ひわびて。泣く音に
 まがみ浦波の思み方より。風や吹く
 らん。これの浦波の音通みらじ。琴
 の音の音通みらじ。琴の音の音の音
 れの弾く琵琶の音。とりからあれや
 村雨の古屋の軒の板庇。目覚まし
 す程の夜雨や。管絃の障あらん。

シテのカタテ 雨カニ

や何ぞや御琵琶を遊ばしとめ
 られてゆぞ。此の村雨の降りゆ
 移は。さそ遊ばし。笛められてゆ
 げに村雨の降りゆぞ。わいかに。焼
 苔取り出し。此の行のため
 いてゆらん。此にて板金と尊
 き渡し。静に聴聞や。さんと

あり 地サシク 思ひよらすも琴の音の押し
 お琵琶を賜りて シテ中用 お座の琵琶を
 調むれば ツレサシク 腕は琴柱と立て並べて
 撥音成音を 心精シ さらり心からりばら
 りと感後も 心精シ ほれきのもどる
 はかりありや 運入心ヨスル 弾いたり弾いたり面白
 師長思 師長中用カニ みやう。師長思 中 みやう。われ

日の本にて琵琶の奥儀と極めつ
 大國と窺 ヨスル せんし。思ひし事の
 清ま ト さよ イ やまのあたり 甲 から堪能
 ありける事 ト 又 ヤ 前 ヤ 珍渡唐 ト と留まら
 んと イ 悲びて イ 塩屋 ト と出て ヨスル 珍 ト へ ヤ それ
 とも イ 知らず ト 琵琶 ト 琴 ト の心 甲 一つ イ のた
 一 イ お イ み イ みて ヤ 趣 ト 天 ト 樂 ト の イ 唱 ト 歌 ト の イ 聲 ト

上上ツカノ別垂シ因カニ梅エダが枝エダにてそソ。鶯ウの巢スとくク入イ風フ吹フカバ
 中中いイカカてテせんン夜ヤにニ宿ヤるル鶯ウ宿ヤ入イのノ帰キるル
 中中もモ知らシずズてテ孫ニいたイたりリ琵琶ヒ琴シ奏ソウうウ
 上上なナうウ旅リ入イのノ御ミ立タちチのノ 行イ旅リ入イのノ
 御ミ立タちチのノとトわワ行イとトてテ留トめメやヤさサぬヌ
 浮ウ二ニ入イ上ウササリリ 祖ソ父フとト姨イはハまマきキりリよりヨリ
 和ワ 祖ソ父フとト姨イはハまマきキりリよりヨリ
 琵琶ヒ琴シ奏ソウうウよりヨリもモ御ミ祖ソとトたタ引ヒけス
 柏カ子シ合ゴ 琵琶ヒ琴シ奏ソウうウよりヨリもモ御ミ祖ソとトたタ引ヒけス

○遊遊子

やヤ引ヒけスやヤ横ヨ雲ウのノ夜ヤのノまマだダ深シくク浦ウ
 のノ名ナのノ明ミかカりリてテおオ立タちチ旅リへヘ 行イじジ
 にニ留トめメ給キみミらラんンまマづヅこコのノ度タのノ帰キ洛ラク
 してシてテ重オモねネてテ尋タねネ中ナカすスべベ。御ミ名ナとト
 名ナ告ツりリ給キへヘやヤ 今イマのノ行イとトかカ色シむムべベ
 まマ。わワれレ絵エ上ウのノまマたりリしシ。村ムラ上ウのノ
 天テ皇ミ梨リ臺ダイのノ女メ所トコロ丈シ婦フありアリ

上月^上御身^御の入^入唐^唐留^留めん^めんだ^だめ^め夢^夢中^中に^にま
 みえ^み須^須磨^磨の^の浦^浦故^故院^院の^の昔^昔の^の夢^夢の^の告^告
 思^思ひ^ひ出^出で^でよ^よ入^入が^がそ^そか^かき^き消^消す^すや^やう^うに^に
 失^失せ^せ終^終み^みか^かき^き消^消す^すや^やう^うに^に失^失せ^せ終^終み^み
 村^村上^上の^の天^天皇^皇と^とは^はわ^わが^が事^事な^なり^り。そ^その^の
 聖^聖代^代の^の御^御譲^譲り^り。唐^唐土^土より^{より}三^三
 後^後ニ^ニ村^村上^上天^天皇^皇上^上朗^朗カ^カ申^申タ^タト^ト確^確カ^カリ
 出^出端^端一^一引^引も^もそ^そも^もこ^これ^れの^の延^延喜^喜聖^聖代^代の^の御^御譲^譲り^り
 中^中末^末序^序間^間

面^面の^の翠^翠翫^翫と^と渡^渡さ^さる^る。弦^弦上^上青^青山^山獅^獅
 子^子の^の龍^龍宮^宮
 へ^へ飛^飛られ^れと^とり^りで^でる^る。出^出し^し弾^弾か^かせ^せ
 ん^んと^と漫^漫々^々た^たる^る。海^海上^上に^に向^向ひ^ひい^いか^かた^た下^下
 界^界の^の龍^龍神^神造^造り^り。聞^聞け^け。獅^獅子^子丸^丸持^持集^集位^位れ^れ
 獅^獅子^子丸^丸浮^浮み^みし^し。カ^カバ^バ。獅^獅子^子
 丸^丸浮^浮み^みし^し。カ^カバ^バ。大^大龍^龍女^女と^と
 早^早苗^苗上^上進^進早^早シ
 龍^龍神^神出^出カ^カ

引き連れ引き連れかしの御琵琶と。
 授け給へ師長賜り弾きあらし。
 父龍王も弦管の役々或は彼の。
 被と打てば或は琵琶の名よし負。
 獅子園乱旋に村上の天皇も。
 奏で給面白かりける秘曲あり早舞。
 獅子にの文殊や百さるらん獅子にの
シテ中用サニ
○仕舞

文殊や百さるらん帝の苑の車
 に系し人龍女に引かれ給へば
 師長も苑馬に鞭とおち馬上に
 琵琶と携へて馬上に琵琶と携
 へて須磨の帰途そ有勢き。

特116

716

著作權所
所有許

大正拾年一月十日印刷
同 年一月十五日發行

訂正著作者

廿四世

觀世元滋

發行兼
印刷者

檜 常之助

京都市上京區三條通麩屋町東北角

發行所

檜 大瓜

京都市神田區錦町二丁目拾番地

印刷所

江 川 堂

京都市四谷區傳馬町貳丁目



續

三

終

